防コミの歩き方

BOSAI KOBE MIRAI

「海抜標識」を真陽地区防災福祉コミュニティの小学校児童が設置

平成23年3月11日発生の東日本大震災以来、全国の沿岸部では津波に対するさまざまな対策が講じられています。神戸市においても、津波を発生させる巨大地震の基本的知識の普及に始まり、警報が発せられた場合の避難の方法にいたるまで、積極的な施策がなされています。

●「自分のいる場所は海抜何メートル?」

これらの前提として、自分の現在いる場所が海面からどれくらいの高さにあるのか、という最も基本的な問題があります。

突然発生する巨大地震に対して、その時に適切な判断ができるのか? その時に適切な避難ができるのか?事前に海抜の認識がある場合とない場合では、大きな違いがあります。

地域住民の皆さんの平穏な生活の中で、時間をかけてこの「海抜」を認識してもらうため、長田区の真陽地区防災福祉コミュニティでは「海抜標識」の設置を企画いたしました。

●世代間にわたる防災対策

巨大地震には風水害のように毎年みまわれるものではありません。他の種類の災害と異なり、時間サイクルが極めて長く、世代を越えた継承性への配慮が必要になってきます。「海抜標識」の取り付け作業も簡単にできるものですので、ぜひとも小学生に参加してもらおうと考えました。

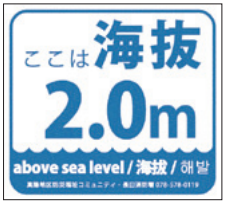
参加した神戸市立真陽小学校の皆さんには、作業の開始前にこの企画の説明をし、趣旨を十分に理解した上で作業にかかってもらいました。

●やっぱり電柱が一番

当初は建物の壁や塀に取り付けようと考えましたが、歩行者からよく見える場所としては、歩道の中に突き出た電柱が一番ということになりました。

設置地点の間隔や異なる海抜値のバランスを考えて電柱を選択し、住民の皆さんに効果的に認識してもらえるように工夫を凝らしました。

取り付け作業中にも、ほとんどの箇所で地元の皆さんから「ほぅ、ここは海抜○○mだったのか」とか、「ウチの近くにも設置してほしいわぁ」と反応があり、住民の関心が非常に高いことがわかりました。

巨大地震は発生サイクルが長いため、子どもたちにもこの経験を長く記憶してもらい、先輩や親になった時には、さらに次世代へ引き継いでもらいたいと願っております。

（長田消防署　菅井　晶）